

Wave



新潟市美術館
Niigata City Art Museum

美術館だより
vol.32
AUG 2 2021



岡本信治郎 《エノケンの自画像》 1983年(2点組の1)

特集

美術館の、今日この頃

インタビュー

LOVE&LIFE展 出品作家 木下晋



新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、美術館は元気に開館しています！
さてさて、今日はどんな活動を展開しているのでしょうか？
本号では、美術館の心強いサポーター、新潟市美術館協会の活動を中心に、
2020年から現在にかけてのできごとをご紹介します。

協力会事務局のみなさん。野外彫刻・峯田義郎《部屋の午後(一人)》を囲んで。(2021年6月撮影)

新潟市美術館協会

美術と美術館を愛する市民の集い「新潟市美術館協会」は、2021年に27周年を迎えます。会報発行や創作講座、研修旅行など会員向け自主事業の企画運営とともに、ボランティア活動を通じて、新潟市美術館の事業を支えてくださっています。



おもなボランティア活動

- 展覧会ポスターやチラシの封筒詰めと、地域への配布を行う「広報支援部」。
- 新聞の美術関連記事等を整理する「資料整理部」。
- 「作品解説部」は、来館者向けにコレクション展を案内する「ふれあい美術館ガイド」を担当。
- 開館中だれでも気軽に遊べるワークショップ「きままプログラム」の企画・準備を手伝う「研修講座支援部」。



2020年3月14日

協力は事務局以外の活動を一時休止。

4月25日～5月11日

全館臨時休館。

9月～12月

「ふれあい美術館ガイド」を休止中の作品解説部が、月に1度の作品勉強会を再開。

希望者7名が、コレクション展展示作品から1点選んで、400文字程度の解説文執筆に初挑戦することになりました。お客さんの反応を見ながらおしゃべりする普段の活動とは勝手が違い、溢れる思いと少ない文字数のギャップに苦戦するメンバー。最後には、作品への素朴な疑問や、個人的な思い出、自画像のイケメンぶり等々、幅広い話題を盛り込んだ解説文が仕上がり、展示室で公開しました。



月に1回勉強会も続けています

2020年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため多くの活動を中止・延期した一方で、こんな時だからこそできたこともありました。

(担当学芸員 上池仁子)

7月下旬～

感染対策のルールを定めて、広報支援部や資料整理部など、一般来館者に接しない活動を再開。

2021年4月～6月中旬

2020年3月から本の閲覧を休止していた「本のラウンジ」。閲覧再開の準備に、資料整理部の力を借りることになりました。

新しい本に美術館の蔵書印を押したり、選びやすい配置に整えたり。重たい美術図書を扱うのは重労働ですが、チームプレーで楽しみながら取り組んでくださいました。6月の閲覧再開後も、書棚の日常整理を行っています。



蔵書印の確認作業

研修講座支援部も大活躍!!

ラウンジNの「きまぷログラム」が再開しました!

その場で誰でも気軽に参加できる、ミニワークショップ「きまぷログラム」。感染症拡大防止のため昨年度はお休みしていましたが、研修講座支援部の皆さんにご協力いただき、3月22日の試作品作り、4月26日の準備を経て、4月27日、1年越しに再開しました。今年度第一弾は「気になる“顔”を描いてみよう!」。丸い紙皿やコースターに描いた色んな顔が集まっています。ご来館の際はラウンジNも覗いてみて下さい。

(担当学芸員 菅沼 楓)



②



⑤



④



⑥



⑨

市美 + 新津美

LOVE & LIFE

コレクションより愛をこめて

2022年2月26日(土)～3月27日(日)

本展では新潟市美術館と新潟市新津美術館の所蔵品より、LOVEとLIFEをテーマに約130点を紹介します。普段なかなか見ることのできない作品も多数登場! 市美・新津美のより一体的な活動への第一歩として、お互いのコレクションを有効に活用していきます。感染症の拡大により他者とのコミュニケーションの在り方や暮らし方そのものが刻々と変化する今、展覧会を通して様々な愛と命のかたちに触れてみませんか?

(担当学芸員 関戸愛莉)



③



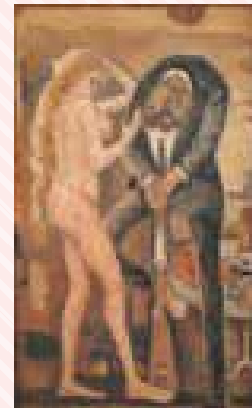
⑪



⑩



⑧



①



⑦

- ① 宮嶋美明《蝕》1981年
- ② 宮嶋美明《遠い空》1984年
- ③ 小柳耕司《森の朝》1983年
- ④ 猪爪彦一《祖父のたまご》1996年
- ⑤ 草間彌生《自画像》1995年
- ⑥ 草間彌生《南瓜》(左から小、中、大) 1983年、1985年、1985年
- ⑦ 草間彌生《銀の靴》2005年
- ⑧ 式場底郎子《古代のヒト(母と子)》1998年、新潟市新津美術館蔵
- ⑨ 式場底郎子《おどろいにしえびと》1995年、新潟市新津美術館蔵
- ⑩ 穂刈春雄《聖地》1997年、新潟市新津美術館蔵
- ⑪ 坂口綱男《安吾のいる風景—礼拝堂》撮影:1982年 プリント:1983年、新潟市新津美術館蔵

19

道具のこと

Q 作品制作に欠かせない七つ道具を教えてください。

A 鉛筆、消ゴム、羽筆、物指し、カッター、電動鉛筆削り器、画鋏、ケント紙、計算器。

Q 愛用している鉛筆は？

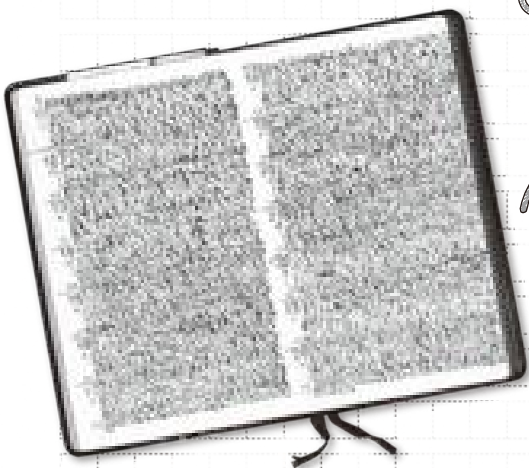
A 基本的には、三菱スーパーハイユニ10H～10B。22段階濃淡を使い分ける為。

Q 制作には写真を使っていますか？

A 写真も使用します。但しモデルにしてる人物の生活状況によってケースバイケースですね😊 其も含めて創造行為の一環です！

Q 手帳にびっしりとメモをされていると聞きましたが、どんなことをメモしているのですか？また、いつから続けているのですか？

A 作家志望の為、言の葉に拘り紙面を文字で埋めるのは生理的現象に近く文章内容に余り意味が無い！強いて言うなら日記の様な携帯手帳😊
此は1980年～2021年その内の2006年迄を版画にしてヒエログリフダイアリー（熊本市現代美術館所蔵）と題して作品化しています。



アーティストにききたい、制作と作品のこと。

ARTIST INTERVIEW 07

LOVE&LIFE展 出品作家

木下 晋

SUSUMU KINOSHITA

木下晋さんは、1947年富山県生まれ。22段階の濃淡を使い分けた、緻密な鉛筆画で知られています。「最後の^{こぜ}賢女」と呼ばれた小林ハルさん、元ハンセン病患者で詩人の桜井哲夫さんなど、困難と向き合う人々を描いた作品からは、その力強い生き様が静かに伝わってきます。現在も、パーキンソン病を患う奥様をモデルに、制作を続けている木下さん。例年は対面でお話を伺う「アーティストインタビュー」ですが、今回はメールを通したQ&A形式で「制作と作品」についてお答えいただきました！

質問・編集：関戸愛莉、荒井直美（新潟市美術館学芸員）

「LOVE&LIFE コレクションより愛をこめて」 2022年2月26日（土）→3月27日（日）

出会い&傍観

市内コレクター所蔵の大作2点！
本展で展示します♪

出会い

Q 木下先生は「ある人との出会い」をきっかけに、作品を描かれることが多いかと思います。《出会い》というタイトルの意味を教えてください。

A 1969年秋、妻になる柳原君子と出会って間もなく、恋人になり！女神の様に想えた時、ミケランジェロのバチカン宮殿に在る『ローマピエタ』をイメージして描きました。



《出会い》1970年、油彩・カンバス、162×112cm、個人蔵

傍観

Q うずくまっているように見えますが…《傍観》の意味は？

A 『傍観』は父親違いの姉が不幸のどん底に居た時、弟として助ける事も出来無く傍観せざるを得ない私の心情を、ゴッホの娼婦クリスティヌを描いた『悲しみ』になぞらえイメージして描いた作品です。



《傍観》1968年、油彩・カンバス、162×112cm、個人蔵

Q LOVE&LIFE展は愛と命をテーマにした展覧会です。木下先生は、あらゆる人の「力強く生きる姿」を描き続けてきたかと思いますが、先生にとって、愛と命とは？

A 愛こそが私の生きる軌跡であり、それを作品に落とし込んで表現するのがアーティストとしての姿勢であり使命は今も変わりません！

Q 印象に残っている、新潟の思い出は？

A 1970年9月北海道に行くつもりで、北陸線特急電車に乗車した。だが車窓から見えてきた、野火の煙が立ち上る収穫期の蒲原平野は☹️心細い我が身を暖かく包むかの様に思えて、衝動的に新潟駅で下車したのだった。
あれから半世紀を過ぎたが、今もその想いは変わら無い。

当館の所蔵品のこと

Q 先生はとても眼が良いとお聞きました。《100年の視力》にちなみ、先生の視力は？

Q 制作期間は？

A 約2ヶ月間の制作期間を要して、当時視力は2.0の視力で描き挙げた。1900年生まれのハルさん(*)は、見え無い眼で来るべく激動の21世紀を見据える巨人をイメージして描きました。

Q モデルについて教えてください！



《100年の視力》2001年、鉛筆・ケント紙、100×190cm、新潟市美術館蔵

(*)小林ハル(1900-2005)：三味線ひとつで新潟・福島・山形を渡り歩いた盲目の女性芸芸人で、「最後の瞽女」と呼ばれた。木下さんはハルさんをモデルにした作品を多数制作している。

マンガと私と美術館

前山裕司 新潟市美術館館長

最近話題の美術マンガがあります。何をいまさらと言われそうですが、山口つばさの『ブルーピリオド』です。評判を知った時、藝大受験の話か、とすぐには読みたいと思いませんでした。クイズなどで特定の国立大学をもてはやす風潮に少し嫌気がさしていたからです。しかし、読み始めたなら引き込まれました。実技試験のテクニックも描かれますが、受験のハウツー本などではありません。「ブルーピリオド」といえばピカソの「青の時代」ですが、青春時代にも重なります。個性豊かな若者たちが、進路や家族、芸術に悩みながら生きる物語です。

数年前にはまっていたのが、大重澄瞳の『映像研には手を出すな!』でした。こちらは読んですぐ、周囲に触れ回るほど。すぐにアニメ化、ドラマ・映画の実写化へと展開され、話題となりました。とくに湯浅政明

監督のアニメは、ニューヨークタイムズなどの2020年度のベストに選出され、第24回文化庁メディア芸術祭アニメーション部門大賞を受賞した傑作です。内容は架空の時代、場所の高校生たちがアニメーションを作る話ですが、現実から妄想の「最強の世界」へとスライドしていく感覚がたまりませんでした。

個人的なマンガ体験を書くときりがないのですが、石森章太郎（当時）の『マンガ家入門』（1968）を読んで、デッサンが大事と書かれていたので美術部に入りました。ですので、美術よりマンガの方が、付き合いが長いのです。

美術館でのマンガの展示はなかなか難しいものです。基本が雑誌のサイズなので、大きく天井の高い美術館では空間とマッチし



「美術館は白亜紀の夢を見る」2006年
五十嵐大介「物語り」の展示
「魔女」の原画コピーと遠山記念館所蔵の絨毯(イラン、19世紀)

博物資料を選んでもらい、作品と一緒に展示しました。初めての敬愛するマンガ家との仕事でしたので、とても緊張したのを覚えています。「日本の70年代 1968-1982」では、「同棲時代」の上村「夫」、「ジロがゆく」の真崎守と、学生時代に読んでいたマンガ家の原画を出品してもらうことができて幸せでした。

新潟市で仕事することになって、高橋留美子、近藤ようこ、高野文子の故郷だ、と思いました。大島弓子、萩尾望都らを指す「昭和24年組」に倣うなら、昭和32年組と呼んで

みたい3人、県立新潟中央高校で同級生の高橋留美子と近藤ようこ、そして新津出身で県立新潟江南高校の高野文子は、それぞれマンガ界で重要な存在です。

2019年にアングレーム国際漫画祭グラン・プリを受賞した高橋留美子は、説明の要はないでしょう。ここで自慢をひとつ、『ビッグ・トゥモロウ』という雑誌の1980年の創刊号に「期待する女性」というアンケートを頼まれ、友人の編集者も知らなかった高橋留美子という名前を書いたことです。近藤ようこの「五色の舟」は、第18回文化庁メディア芸術祭マンガ部門大賞を受賞しました。

ません。あまり広くなく、天井も高くない美術館の方がよく似合います。加えて難しいのは、右から読むという日本のマンガの特性で、壁の設置の仕方、順路も制限を受けます。近年では、手描きの原稿でなく、デジタルで作画されていることも多いので、何をどう展示するかも考えどころです。

前の職場、埼玉県立近代美術館ではマンガを展示する機会を狙っていました。「美術館は白亜紀の夢をみる」という展覧会では、埼玉県出身の五十嵐大介に、遠山記念館から

津原泰水の伝奇的な短編小説を原作に、見世物小屋に身を寄せる異形の人たちが儼く描き出されています。高野文子は評論家、マンガ家、美術関係者が言葉を尽くして絶賛する孤高の存在ですので、うかつな言葉を連ねることはやめまします。多くの名作の中から、病気になる「トモコさん」。新潟鉄道病院に入院した体験が反映されているという作品ですが、その夜空に舞うオペラートの美しさを讀めることで終わりにします。

（敬称は略させていただきます）



2021年4月10日(土)

トークイベント 『画家・佐善明の リアリズム その画業と 新潟との関わり』 を、開催しました!

講師:佐善圭氏
(桜美林大学芸術文化学群准教授、彫刻家)

コレクション展Ⅲ「クンシランの記憶」(2020/12/24~2021/4/11)では、新潟出身の画家・佐善明(1936-91)の特集展示を行いました。当館所蔵の佐善作品全12点の展示にとどまらず、ご遺族のご協力を得て、あまり知られる機会がなかったデザインに関する仕事の数々をご紹介します。さらには、佐善明のご長男であり自身もアーティストである佐善圭さんをお招きしてトークイベントを実施!佐善明ならではのネコプリントを使った絵画技法、新潟大学を卒業し故郷を離れてからの新潟とのつながり、圭さん自身の幼い頃に父と訪れた新潟の思い出。当館所蔵の《Mother's Students(1944年)》(1986)を、実は実家で描いていた!というエピソードなど、画家の新たな一面に迫る貴重な機会となりました。イベントは満員御礼!これからも、調査研究を通して、新潟の作家たちをご紹介しますまいります。(担当学芸員 児矢野あゆみ)

